

ウサギ心嚢液の生理値に関する基礎的検討

浅野 裕三, 溝口 靖基, 水口 浩康, 松岡 哲也, 芹沢 光太郎,
石倉 寿一 (ボゾリサーチセンター・函南研究所)

【緒言】心嚢は通常少量の液体を含み、その潤滑性によって心膜の円滑な動きが果たされている。心嚢液は心筋病変から量的或いは質的な変化を生じ(イヌ)うっ血性の心疾患、リンパ腫、感染症或いは稀に腎疾患により二次的に反応するとも言われている(ラット、ネコ)。著者らは日常のウサギの剖検において、心嚢液量或いは色調に大多数のものと異なる例を経験しているが、ウサギの心嚢液量及び色調に関し、参照すべきデータはほとんどない。今回、我々は日常生殖発生毒性試験に用いているウサギ2系統について、心嚢液の量、色調及び臨床パラメータを測定して、性差、加齢、系統及び妊娠の有無による差を検討したので報告する。

【材料と方法】Kbl:JW 雄及び非妊娠(14、20週齢)、同系妊娠ウサギ(39~43週齢)、Kbl:NZW 非妊娠ウサギ(23週齢)及び同妊娠ウサギ(21~23週齢)の各12匹について、心嚢液の量と色調を観察記録した。さらに、Kbl:NZW及びKbl:JWの妊娠ウサギ(21~23週齢)の各9匹を用い、臨床パラメータとして、心嚢液の細胞数、比重及びタンパク量を検査した。

【結果およびまとめ】心嚢液の色調はいずれのウサギの場合も無色であった。JWの液量には性差はみられず、非妊娠ウサギと妊娠ウサギの系統内比較でもJWおよびNZWともに差はみられなかった。JWの妊娠ウサギでは週齢の進んだ動物で液量が多かった。系統間の比較では非妊娠ウサギで液量の差はみられなかったが、妊娠ウサギではNZWに比べJWが多かった。検討した臨床パラメータの系統間比較では、比重およびタンパク量で差がみられなかったが、JWに比べNZWで細胞数の多い傾向が認められ、液量の差による影響が示唆された。